

K S K

# きずな

第172号

編集 神奈川県障作連  
責任者 六反芳樹  
印刷所 榎Yuki Print  
発行日 令和4年11月2日

## つながることの 大切さと難しさと

理事長 六反 芳樹

### —今後の活動に向けて— 定例幹事会概要報告

令和五年となりました。気持ちも新しくして日々バタバタ動いています。皆様も一緒に動いてと思います。今回の「きずな」では新年のご挨拶と、毎月一回、各地区の役員さんと幹事会をしており、その時の話の一部をご紹介します。さて、挨拶といってもどうしましょうか。こんな事を考えるのは

決まって夕方以降の通所者も職員も帰って昼間のにぎやかな作業所がひっそりと静かになったときです。活動中はそんな余裕はありませんから。作業しながら通所者の話に相槌をうち、合間を見て電話応対。そして車で配達。皆さんも同じだと思います。そのギャップが大きいからか、静かな作業所に居るといろいろと考えるわけです。それが割と好きな時間でもあるのですが。

先日他の作業所の同僚と久々にゆっくり話す機会がありました。「こんなこと出来たらいいね」といった未来志向な話で盛り上がりたわけですが、最後の方は「結局課題や悩みは二十年前から変わってないよね」といった結論で散会しました。後で考えてみると法制度は進んでいるのに何故そのように感じるんだろう？私の好きな作家のコメントで、「獲得して得たことは記録に残る。失い喪失

したことは記録に残らない。それが歴史である」という一文があります。ひとつ得るためにひとつ失えば結局「ゼロ」です。だけど記憶にはひとつ得たことだけが記録される。日々頑張って達成感はあるのだけど何だか前に進んでいることを実感できないのは何故だろうか。私だけでは堂々巡りなのか、私にはキーワードがあります。それは「皆」と「気持ち」です。ひとりの両手に乗る量には限界があります。でもふたりで腕を組めばもっと乗せられます。もっとたくさん集まればもっとたくさん乗せられます。「ひとりよりふたり。ふたりよりたくさん。」このような気持ち私たちが原点なのだと思います。実際にこれまで私は周りの皆さんに助けられてきたし元気をもらってききました。小規模な作業所に身を置いている私にとってはかけがえのないものです。作業所に通ってくる皆も周りの皆との繋がりを求めて毎日くるんだろうな。私と一緒にです。

昭和五十二(一九九七)年に神奈川県に地域作業所の要綱が定め

られて、翌年に障作連が発足しました。かつてと比べると事業形態も運営母体も多様化してきましたが、それでも個々の事業所規模は小規模であり、少ない職員でやりくりしている状況は変わりない様に思えます。私の事業所の業務だけで手一杯だという事は容易に想像できません。その様な状況下でも機能していく連絡会の在り方を模索して行く事は急務であると考えています。

障作連の記念誌で「一〇年のあゆみ」と「二〇年のあゆみ」というのがあります。その中の座談会の議事録を読んだのですが、社会や制度が変わっても課題として話している事は今とあまり変わらないと感じました。もしかしたらその様な座談会をする機会が減ったことが変わった事なのかもしれません。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

二月九日、定例幹事会で皆さんからご意見を伺いました。今後の活動に向けて大切な意見が多く出されましたので、ご報告するとともに、活動方針につなげてまいりたいと思います。

六反…今日検討していくのは、まあ前回の続きともいえませんが、次年度の活動計画というか活動方針というかも一度確認を取って進めたいんですが、これは僕たちの根本であると思うんですけれどもつながっていくことが第一なんです、そういうのは数字には出て来ないし結果にも見えにくいという現状、なかなか難しいなって思うんです。でもそれって外せないし、小規模である以上は自己完結というのはやっぱ危険なことだと思う。自分たちは大してできないけどでも自分たちの問題だっことを伝えていければいいかなって思うんです。それにはやっぱ実績って言うか、ああやってるんだなっていうのがわかればいいと思うっている。コミュニケーションが柱の一つとしてあるのはいいんですが、それだけでは難しいのかなっていうのが心半分。その半分をどう補完していけるのかを考えたい。漠然と「つながって」だけでは材料があまりにも乏しい。中途半端な投げかけで申し訳ないんだけど。

海原…一番の柱としては制度や施策についての取り組みです。県や

県議会との窓口っていうのは県の障害連がずっとやってきて、この会でしかできない、できなくなっています。小さいところの意見をちゃんと述べていくということ。次に、研修です。昨年度ほぼほぼコロナでできなかったけれども、ある意味ズームの研修を皆さんが行っています、けっこうきつくって。でも事業として位置づいている以上はやっぱ整理してやっていく必要があるでしょう。あとはともしび生産の会員さんが多くいる中で、利用者さんの製品に今注目が集まっている。これをやっぱ製品化するような、付加価値をつける研修をうっていてもいいのかなって思います。それと積み残しになっているんですけど、情報発信をどうするか。私達すごく下手くそ、私も含めてそう思ってるんです。今若い人たちがいろんな事業を展開していく中で、SNSですか？そういうことはすぐくやってみるし、またけっこう見やすいなってところもあるの、若い人たちを講師としてお願ひするっていうのもあるかなって思います。それとも一つはやっぱりこの混沌とした時代、私達は

何をしていくのかが、すぐく見えづらくなってきてる。そういう中で障害者総合支援法が、十二月十日に改正法案が通ってその中に細かい付帯決議がついています。それを具体的に実際どういうふうにしていくのか？まだ対応ができていない。そういう情勢の研修も今までやってこなかったけれども興味あるなしにかかわらず少し取り組んだほうがいいのかと思ってます。もう一つ事業所の側面支援として。障害福祉サービス事業に移行した中で一番実は困っているのっていわゆる加算の三段重ねになっている補助。これをどうやってたらいいのか？すごく悩みの種なんです。あの三層構造、何とかしてほしい。いわゆる個別給付に移ったところは加算とか報告書を簡単にできるっていう部分の研修は本当にやってももらいたい、切望しているところなんです。そういうような研修があってもいいかなって思っています。じゃあ地活の部分のところではどんな研修をしたらいいかっていうことは、地活の方たちが何を求めているかっていうのをきちっと把握してやっていく必要性がある。

小杉…障害連が障がい者の方たちを支えてきたことは評価されてはいる。だとしたらそれはうたつていかなきゃ。個別給付にいくのは時代の流れでしょうがない。でもそこに困り感っていうのがこれだけあるんだって。今まで福祉の土台を支えてきたのってこういう事業所なんだって。その一番頭に立たなきゃいけないのはやっぱ障害連。もともとそういう意図を持って出発してきてるはずなので。原点はここだよ、振り返るべきだよ。多分今のコロナでどの事業所も困っているはずなんです。その困り感だけは言い方変ですけど原点に戻るべきなのかなと。それが今の「当事者目線」であつたりとか、地域の部分だったり、重層的な部分も、もともと大事な部分を障害連がやってきた。いっしょかわつちやっただよって言われたときに原点忘れちゃだめだっと思えます。地活は地活で情報を収集して県に持って来なきゃいけないでしょうし、個別給付は個別給付で、困り感？書類であつたりいろんなものを整理した上で議会なりに持って来なきゃいけない。広報にしても、困り感をうたつていくのもありなのかな。H

Pにアクセスしてブログ的にやるのもいいだろうし。地活の困り感でほんとに山のようにあるわけです。みんなの困り感を吸収しながら聞きあう会、ディスカッション系の研修会もありかも。そういう部分をほんとに県障作連として、ダイレクトに言えるって、その場にいるって、この会の大きさだと思えます。これは今までの方たちが頑張ってきた勝ち取ったもの。だとしたらそこをやっぱり柱にして、もともとの原点発祥で持つていけばいいのかな。だからもう一度今の制度も踏まえて、みんな情報交換しながら連携取っていけば、どこかでタイミンクするんじゃないの？もう一度僕たちがみんなにアピールしなきゃいけない場面が絶対来る。そう思っています。コロナでいろいろ言ってますけど現状知ってもらってのは地活、個別給付関係ないと思うんです。「地域」って言ってみんなを支えてきたこの県障作連の役割なんだろうなって。僕はそこを柱にして進めてほしいなと思ってます。

野原・地区とか県障作連とかで地活会議みたいなのをしてください

てみんな悩み事を分かち合ってこの課題に対してはみんな各町村で訴えていこうとか、そういう研修みたいなのがあってもいいと思いました。なんかバツクアップがほしい。県の障作連の中で、地活あつまれみたいな研修。県障作連の会員も増やす方向で、もうちょっと全事業所にアピールして、こんな事やってくよとか、つながっていきよとか。障作連のPRって広報がやるのかわかんないですけど、ちょっと力を入れてもいいかなって思っています。

定例幹事会のひとコマを紹介させて頂きました。今後も会員の皆様に伝わりやすい形で活動をご報告する機会を作っていきます。

(広報部)



## 新しい生活様式に対応 城下町 おだわら

### ツーデーマーチ

小田原市スポーツ課

寄稿

小田原市では、二日間で延べ参加者数七千人以上が参加するウォーキング大会「城下町おだわらツーデーマーチ」を毎年十一月に開催しています。同大会の参加者数は、国内のウォーキング大会の中でもベスト5に入る参加者数を誇ります。

小田原市を中心に六kmコースから三〇kmコースまでのコースがあり、参加者は自身の体力にあわせてコースを選ぶことができます。

誰もが参加しやすい

大会を目指して

大会を主催する市スポーツ課では、年齢や障がいの有無等に関わらず同大会に参加していただくことで、スポーツ・身体を動かすこ



との楽しさを感じてもらいたいと考えています。そこで、大会内容の企画段階から、福祉団体の方々にご意見をいただくとともに多大なるご協力をいただいております。例えば、大会実行委員会には福祉団体の代表の方にご参画いただき、ご意見をいただきました。また、コースの下見は、理学療法士の方や福祉作業所の方と実施して、コース上の段差や車いすでコースを通る上での注意点などについて、ご意見をいただきました。

さらに、市内福祉施設に大会の参加招待券をお配りしたり、大会会場では市内福祉事業所の物品販売テントを用意して、参加者に豚汁等をふるまってもらいました。



障がいのある方にとって、スポーツイベントへの参加はハードルが高いかもしれませんが、福祉事業所の方々にご協力いただくことで、障がいのある方々に「私も参加してみようかな。」と考える機運を高めています。

### 福祉部局との連携企画を実施

福祉健康部局では、共生社会の実現を目指して、障がいの有無に関わらず『気軽に』『誰もが』楽しめるイベント、障がいがある方の社会参加を促すイベントの企画を検討していました。

そこで令和四年度には、福祉健康部局とスポーツ部局が連携して、本大会の特別企画として、「パラ

スポーツ体験会」を実施いたしました。これは、大会主会場近くの体育館でボッチャ等のパラスポーツ（ニュースポーツ）六種目を体験できるイベントなのですが、事前の福祉団体等へのヒアリングを実施したところ、「障がいのある方に参加いただくためには、気軽に参加できる雰囲気をつくることが大切。」といったご意見をいただいたことを踏まえ、入退場自由の縁日のような雰囲気を実施しました。

同イベントには、合計で百五十八人、内障害者手帳保持者七十九人の参加がありました。その障がい種別は身体、知的、精神など様々な障がいのある方に参加いただくことができました。企画段階から福祉団体のご意見をいただくことで子どもから高齢者まで障がいの有無に関わらず『気軽に』『誰もが』楽しめるイベントを実施することが出来ました。

### 今後の方針

同大会は、数年前から福祉団体の方からご意見をいただいていたというベースがあったため、「パラスポーツ体験会」という新たな

イベントも実施することができました。今後も、様々な皆様からご意見を頂戴しながら『誰もが』楽しめる、社会的にも意義のあるスポーツイベントを目指してまいります。



## できることをできる範囲で できるだけ

### 3年に及ぶコロナ禍での各地区、市の活動紹介

新型コロナによる大きな影響は3年間に及んでいます。各事業所が大変な思いで活動してきました。ささやかでも明るく、元気が出るような取り組みを！小田原市の取り組みもありますように、各地区の工夫と努力で復活してきた事業や行事も少しずつ増えてきたかもしれません。気を使いながら…でも前を向いていきたい、そんな思いから各地区・市、の活動などを紹介します。

## NHKで紹介！ 浜辺にでかけて海藻の作業

ほんとにいい笑顔が見られて

鎌倉市 虹の子作業所

一昨年前のことです。コロナ禍で作業所と家の往復しかできない中、NHK テレビで浜辺で楽しそうに海藻拾いをする映像が。鎌倉市の虹の子作業所のみなさんが笑顔で海藻を集めている姿が紹介されていました。コロナ禍前から取り組んでいた活動ですが鎌倉漁業協同組合と海のSDGsを実行する会のお声掛けで再開いたしました。久しぶりの外での活動にいきいきとした笑顔が見られた活動となりました。鎌倉海藻飼料の仕事は、海岸で海藻拾い→洗って天日干し→乾燥機で乾燥→小さくハサミで切って布袋



に入れて細かくする。→ミキサーで粉碎→そして最後にビニール袋詰めをします、『鎌倉海藻ポーク』として販売されている豚の飼料となるものです。鎌倉海藻ポークは水産・畜産・福祉の連携で生まれた鎌倉ブランド豚です。通販でも購入できます。海の近くの事業所であることからできるこの活動に、コロナ禍で鬱々としていた毎日でしたがホッとする時間を過ごせました。

## けんおうまつり復活？ 地区交流会

野外の公園で。スタンプラリーとゲームなど

県央地区連絡会

コロナ前は毎年300人以上の利用者さんと職員でけんおうまつりという交流会をしていました。

地区内の公園で写真を取ったりお菓子を配ったり、この2年間は本当にささやかですが続けてきました。今年度は座間市芹沢公園で、少しだけ内容を広げてけんおうまつりを復活しました。座間市も快く後援をしてくださりました。参加利用者さんは時間を調整して一度にたくさん集まらないように。管理棟を使って少しだけゲームをして、あとはスタンプラリーなど。全事業所の参加は無理でしたが、集まれる範囲で少しだけ交流。「やっぱり会えるのはいい！」これからも工夫しながら続けていけたらと思います。



## 平塚市役所での、3年ぶりの展示即売会

湘南西地区 平塚市作連

コロナ禍前には一年に4回開催されていた、平塚市役所での展示即売会が、昨年10月、2年10か月ぶりに再開されました。広い会場で、当番は



発行

神奈川県障害者定期刊行物協会  
〒222-0035 横浜市港北区鳥山町1752番地  
障害者スポーツ文化センター横浜ラポール3階横浜市車椅子の会内

編集

(特非)神奈川県障害者地域作業所連絡協議会  
〒222-110825 横浜市神奈川区反町3丁目17-2  
045(290)0501  
頒価 百五十円

事業所職員のみで、感染対策をしての開催でしたがとても盛り上がりました。その後、12月にも開催出来ました（ワクチン接種会場の都合上縮小されましたが・・・）。来年度も開催できる予定です。利用者さんも一緒に当番が出来るといいのですが。7月には、湘南西地区主催で「ふれあいボウリング大会」を開催しました。これも3年ぶりです。規模を縮小して、一番楽しみな表彰式もなしでしたが、皆、とてもいい笑顔でした。

## スマホアプリで福祉情報を！公開

### ちがさき障がい者支援アプリ 茅ヶ崎市

「ちがさき障がい者支援アプリ」という仕組みが、令和5年1月24日にスタートしました。誰でも無料で利用出来るもので、スマホで簡単に操作できます。（利用にかかる通信料は自己負担）。機能としては以下のような内容となっています。

1. 事業所一覧・空き状況の検索
2. 「障がい福祉のあんない」冊子のデジタル化
3. お知らせ配信
4. オンライン相談予約・手話通訳者等の派遣申請
5. デジタル障害者手帳「ミライロID」との連携
6. バリアフリーマップの掲載（令和5年3月掲載予定）

特に学齢期の前、障害があるとわかったときの保護者の方などはこの先どうしよう？どんなサービスを使えばいいか？どこへ行って相談すれば？等々、という声をたくさん聞きます。このようなしくみを望む声はとても多いでしょう。実際にアクセスしてみると、例えば事業所一覧、というところではサービスの種類別に各事業所が写真つきで、空きがあるかどうかということまで情報が掲載されています。県内で初めてと言っているいい仕組みであり、とても有効なもので今後の発展が期待されます。



## 地区啓発活動 活動報告

## 赤い羽根共同募金



各地区市町村支会との連携で取り組んでいる赤い羽根共同募金。この3年間、中止や制限下での開催、利用者さんの参加もできたりできなかったり等々、様々な形で行われてきました。今年度もすべてコロナ禍前ということにはなりませんでしたが、何らかの形で運動を継続してきました。各地区の結果を掲載しました。

### 令和4年度地域啓発キャンペーン報告

地区	日程	人数(人)	金額(円)
川崎	10月7日	61	69,377
横須賀	10月4,7日	58	40,707
湘南東	10月7日	43	23,031
湘南西	11月末まで		41,351
西湘	10月3,7日	57	49,294
県央	10月7日	49	38,569
相模原	10月7日	30	21,220
横浜ⅠⅡ	10月3,4,5,6,7日 および施設内募金	134	17,543,364

募金総額 17,848,411円